ミス・ボルドローとは何者か

――「アスパン文書」と，想い・描かれ・訪れ得る過去――

Who Is Miss Bordereau?:
“The Aspern Papers” and a Palpable Imaginable Visitable Past

畑　江　里　美

要　　旨

「アスパン文書」は，1888年に発表され後にニューヨーク版選集にも収録された，ヘンリー・ジェイムズ中期の中編小説である。名前の明らかにされない語り手は，すでに故人となって久しい詩人アスパンについて調査する批評家で，詩人が数十年前に恋人に宛てて書いたとされる書簡をいかなる策を弄しても手に入れようと画策するが，結局失敗する。「アスパン文書」はそのような物語であると，一般に受け止められている。だが，一人称の〈物語世界内〉の語り手によって語られる物語は，原理的にその語り手の意識の支配下にあり，そこにはイリュージョンの格好の仕掛けとなる余地がある。本論考では，アスパン縁（ゆかり）の事物を巡る語り手の思考と発話に注意を払って物語を検証することで，上記の解釈が自明の前提とは言えないことを明らかにし，それを踏まえて，語り手が物語を語ることによって何を成し遂げているのかを探っていく。

キーワード

一人称の語り，イリュージョン，歴史と物語，「内的証拠」，名前

はじめに

「アスパン文書」“The Aspern Papers” は，1888年に発表され，後にニューヨーク版選集にも収録された，ヘンリー・ジェイムズ中期の中編小説である。決して名前の明かされない一人称の語り手を持つという点で，「ねじ

の回転」“The Turn of the Screw”と同様の特徴を持つこの作品は，ニューヨーク版では同じ第12巻に収められている。この作品の語り手は，すでに故人となって久しいジェフリー・アスパン Jeffrey Aspern について調査する批評家で，詩人が数十年前に恋人ジュリアーナ・ボルドロー Juliana Bordereau に宛てて書いたとされる書簡をいかなる策を弄しても手に入れようと画策するが，結局失敗する。「アスパン文書」はごく簡潔に要約すればそのような物語であると，通常，受け止められている。

それが定説であることは，例えば Oxford World’s Classics 版のイントロダクションでエイドリアン・プール（Adrian Poole）が，「「アスパン文書」では，ある文人の遺産を巡る古典的な争いが繰り広げられる。争うのは，亡くなった詩人の私的な文書を略奪しようとする著述家とそれを守護する女性たちである ‘The Aspern Papers’ stages a classic struggle over a writer’s legacy, between a predatory man of letters and the women who guard the poet’s intimate papers.」（Poole 2013 vii）と書き，またミス・ボルドローについては「はるか昔にジェフリー・アスパンの恋人だった老婦人，ジュリアーナ・ボルドロー the old lady, Juliana Bordereau, who was Jeffrey Aspern’s lover a lifetime ago」（xii）と紹介していることにもうかがわれる。

だが，一人称の〈物語世界内〉の語り手によって語られる「アスパン文書」という物語は，原理的にその語り手の意識の支配下にある。数十年前の出来事であるアスパンとミス・ボルドローの関係がどのようなものであったのか，語り手は伝聞としてしか知りようがなく，読者はその語り手を通してしか知りようがない。ジェイムズは，小説におけるイリュージョンの効果に大いに関心を抱いていた作家である（Flannery 134）。そして，信頼性に疑問のある一人称の語りは，イリュージョンを生み出す格好の仕掛けとなる。ヒリス・ミラー（J. Hillis Miller）は次のように述べている。

ジェイムズはいつでも読者に大量の，大量すぎるほどの事実を提供する。……遺憾ながら，それらの事実はいつでもあれこれと遠回しである。不確実だったり曖昧だったりするのだ。……基本的にジェイムズは，私がどう結論すべきか，どう登場人物たちを評価し判断すべきかといったことを，はっきりと表明したりはしない。……ジェイムズを読むとは，判断の根拠が確実とは言えないまま判断の責任を負わされるという，困った状況にはまり込むことなのだ。James always gives the reader abundant, even superabundant, evidence…. Unfortunately, the evidence is always in one way or another indirect. It is problematic or ambiguous…. The rule is that James never tells me in so many words what I should conclude, how I should evaluate and judge the characters…. To read James is to be put in the pickle of being made responsible for judgement when the grounds for judgment are not entirely certain.（15）

つまり，この作品についての読者の解釈は，読者がそこに読み込んでしまったものになる可能性に常に付き纏われているということになる。

そのような条件のもとで，先に述べた通説となっている作品のあらすじは，どれほど充分な根拠を物語の中に持っていると言えるのだろうか。本論考では，まずアスパンとミス・ボルドローの関係について読者が知りうることを検証し，それを踏まえて，ついに書簡を手に入れることのかなわなかった語り手が，それにもかかわらず，物語を語ることによって何を成し遂げているのかを考察したい。

1．アスパンとミス・ボルドロー

性的な関係の内実は本質的に当人以外には不可知な歴史であると論じる

ミラーはまた，語り手がミス・ボルドローの姪ティーナ Tina の夫となっていたら手に入れられたはずの知識は「ジェフリー・アスパンとジュリアーナの間の性的関係のパフォーマティヴな反復 performative repetition of the liaison between Jeffrey Aspern and Juliana」（25）であるとも述べている。この言葉はミラーがアスパンとジュリアーナとの間の性的関係を前提としているように読める。しかし別の箇所では「ジュリアーナ・ボルドローとジェフリー・アスパンとの間に推定される恋愛沙汰は，どうやらティーナの誕生という結果をもたらしたらしいが，そのことは確証のない仄めかしにとどまっている the presumed love affair between Juliana Bordereau and Jeffrey Aspern that apparently resulted in Tina's birth, though that remains an unverified hint」（21）と，含みのある書きぶりを示し，さらに

> ［語り手］はジュリアーナ・ボルドローに魅了されている。その理由は，彼の考えによれば，彼女がジェフリー・アスパンと寝たことがあり，ミス・ティーナがその関係の生きた証だからである。[The narrator] is fascinated by Juliana Bordereau because, so he thinks, she has slept with Jeffrey Aspern, with Miss Tina as living evidence of that liaison.（23）
>
> 「アスパン文書」の語り手は，ミス・ボルドローがアスパンの愛人だったことを見つけ出す，あるいは見つけ出したと思う。The narrator of "The Aspern Papers" discovers, or thinks he discovers, that Miss Bordereau had been Jeffrey Aspern's mistress.（24）
>
> ［語り手］が負うはずだったのは，ジュリアーナが愛人になったことでアスパンに対して負うことになった無限の責任である。（もし彼女が実際に愛人になっていたのならであるが，それを確実に知ることは不可能だ。）

> [The narrator] should have the infinite responsibility Juliana incurred toward Jeffrey Aspern by becoming his mistress (if she did in fact do that, which can never be known for certain).（25）

と述べ，ミラー自身は語り手の見解から距離を置いているように見えるのだ。

はっきりとティーナをジュリアーナ・ボルドローとアスパンの非嫡出子であると判断している論者にジョン・カーロス・ロウ（John Carlos Rowe）がある。ロウは「そうした結論を引き出すに足る情報を……ジェイムズは我々に与えている James gives us…just enough factual information to draw this conclusion」（105）と主張する。だが，この見解に異を唱えるような「疑り深い読者 suspicious reader」に対する想定上の応答として，「ジェイムズはいつものように注意深く，［ロウのような］推測を誘うに足る堅固なデータを与えているのだが，同時に，それらのデータは，そのほとんど全てが疑問視されるに足る主観的なコンテクストに置かれているのである James has been careful, as usual, to provide sufficiently hard data to tempt such speculations [of Rowe's] and yet to place such data in sufficiently subjective contexts to call into question nearly all of them」（106）と述べ，次いで「《決定不能な事柄》“undecidables”」に関しては「批評上の選択 critical choice」がなされるものだと断じている（106）。これは事実上，自身の見解は一つの「選択」だと認めているのに等しい。

まさにティーナの出自という問題に焦点を当てて論じたのが，バーナード・リチャーズ（Bernard Richards）の「ジュリアーナ・ボルドローには何人の子があったのか？　“How Many Children Had Juliana Bordereau?”」である。リチャーズは，それが作中人物を実在の人物であるかのように扱う誤謬となる危険性を認めつつも，作中の情報のみならず，ジェイムズに

よる作品の執筆を取り巻く状況までも考慮に入れて，どのような場合にティーナが二人の娘でありうるのかを検証する。興味深いのは，ヴィクトリア朝において，姪や甥という呼称は非嫡出子の婉曲表現として用いられていたという指摘である。しかし，様々な可能性を挙げた上で，最終的にリチャーズの下す結論は，

> ティーナが，ジュリアーナとアスパンか誰か別の男との間にできた娘だというのはありうることだが，その可能性が圧倒的に高いというわけではない。思うに，それを可能と見るために必要とされる批評上の自由を行使することは，少しばかり独断的だし不道徳でもあるのではないか。結局のところ，そのような解釈を論駁の余地なしとするための明確な情報は，どこにも存在しないのである。[I]t is quite possible that Tina is Juliana's daughter either by Aspern or some other man, but not, I think, overwhelmingly likely. For my money, the critical liberties one needs to take to make this possible are just a shade too high-handed and illicit. Finally the precise information to make such an interpretation cast iron is simply not there.（128）

ということだ。つまり，作品内にはティーナの出自について明確な情報は与えられていず，したがって，ティーナがアスパンとミス・ボルドローの娘であると考えるのも考えないのも読者の解釈でしかないということになる[1)]。

では，語り手自身はティーナがアスパンとミス・ボルドローの娘であると考えているのだろうか。この点についてリチャーズは否定的である（22）。ただしリチャーズが着目するのは，作品中で語り手が，ティーナの年齢について「なるほど彼女は過去に遡る。この穏やかなオールド

ミスは，だが，ジェフリー・アスパンほど遠い過去まで遡るわけではなく，アスパンについてただ伝え聞いたことしか知らないのは，私と変わらない She[Tina] did indeed [go back], the gentle spinster, but not quite so far as Jeffrey Aspern, who was simple hearsay to her quite as he was to me.」（28）という認識を示していることなので，あまり強い根拠とは言いにくい[2)]。とはいえ，作品中に語り手がティーナはミス・ボルドローの姪であるのかどうか疑問を抱いていることをはっきりと示す箇所は見受けられない。むしろ，語り手は，「ティーナが娘である可能性に気付かずにいる he misses. . . the possibility that she is Aspern's daughter」（Reesman 152）という指摘が妥当であるように思われる。語り手がアスパンを崇拝し，その遺品を手に入れることを切望していることを踏まえれば，語り手のティーナに対する振る舞いはアスパンの忘れ形見（かもしれない）と見なしている女性に対するものとは到底考えられないからである。

アスパンとミス・ボルドローが恋人関係にあったという読み方は，ティーナの出自の問題と比べ，はるかに広く共有されているが，その根拠についてはより慎重に検討されなければならない。語り手の認識については，例えば，アスパンをジュリアーナの “lover”（9）と呼び，ジュリアーナをアスパンの “mistress”（33）と呼んでいることから，二人の恋愛関係を想定していることに疑問の余地はなさそうである。だが，当人しか知り得ない事情について，当人からの証言はどこにも存在せず，当時の二人を知る人物からの目撃証言があるわけでもない。にもかかわらず，この二人の問題がティーナの問題と異なるのは，二人が恋人であったことを示唆する物的証拠が，アスパンの詩句，書簡，肖像画と，充分すぎるほど揃っているように見えることだ。果たして，これらの物的証拠は充分な証明力を備えているのだろうか。

2．アスパンの詩

しばしば指摘されているように，アスパンの批評家／編者／伝記作者を任じる語り手の語る物語の中に，アスパンの詩についての言及はあっても，詩自体の引用は一切ない。実際，「語り手がアスパンの〈詩〉そのものにほとんど関心を払っていないことはしばしば指摘されている It has often been noted how relatively little interest [the narrator] actually shows in Aspern's *poetry*」（Hadley 315）ほどで，どのような作風の詩人であったのかさえ読者に示されることはない。「ご婦人の詩人ではない not a woman's poet」（5）という漠然とした評価めいたものはあるものの，それも，詩人の作風についてのものなのか詩人の人となりについてのものなのかは判然としない。詩の内容に言及する場合は，作品そのものを鑑賞したり批評したりするためではなく，もっぱら詩人の生涯における伝記的事実を推定するための材料としての扱いである。

語り手は，「アスパンが二度目にアメリカを離れた折に，ジュリアーナに向けて書かれたいくつかの詩／節 some verses addressed to her by Aspern on the occasion of his own second absence from America」と思われる材料のうちに，「彼女のために［ヨーロッパに］戻ってきたのだ he had come back for her sake」というアスパンの「告白 profession」を読み取る（29-30）。だがその際，くだんの詩の創作時期について，アスパンを信奉する同志であるジョン・カムナー John Cumnor と語り手は，「無限の憶測 infinite conjecture」を重ねた上で「概ね確か solidly enough」と言える程度に推定したのだし，またアスパンの「告白」が「単なる言葉の綾ではない not just for the phrase」と「願っている hope」と述べてもいる（30）。この辺りの語りでは，仮説や推測を意味する語句が繰り返し用いられ，推定の根拠の不確かさが強く示唆されている。

さらに語り手は，1820年代当時のジュリアーナの境遇について，実のところ「はっきり分かっていることは何もない had no real light on her circumstances」と断った上で，カムナーと自分がそれぞれに立てた「仮説 theory/hypothesis」を披露する（30）。語り手の推測は，想像力を羽ばたかせた一つの「ロマンティック」な物語と呼べそうなものだが，それによれば，母親は早くに亡くなり，貧しい画家か彫刻家だった父親がアメリカを棄ててヨーロッパに渡ったため，ジュリアーナはヨーロッパの芸術家たちのボヘミアンなコミュニティの中で暮らしていたことになっている。

> さらには，若い頃のミス・ボルドローは，広い心を持ち周囲を魅了する人柄ではあったが，しきたりを気にかけない向こう見ずでもあって，いくつかの驚くような危険を冒してきたのだと暗示されていた。いったいどのような情熱が彼女を襲い，どのような危険や苦難が彼女を漂白してきたのか。単調な未来に向けて，どのような記憶を彼女は仕舞いこみ貯めこんできたのか。
>
> There was a further <u>implication</u> that Miss Bordereau had had in her youth a perverse and reckless, albeit a generous and fascinating character, and that she had braved some wondrous chances. By what passions had she been ravaged, by what adventures and sufferings had she been blanched, what store of memories had she laid away for the monotonous future?（30　強調筆者）

語り手は，自らの考えは「暗示」された情報に基づくものだとこのように認めた上で，さらに「仮説を紡ぐこと spinning theory」を続けていく。

> 正しいかどうかはともかく，アスパンの詩のうちのいくつかを読んだ

者の多くが……ジュリアーナは禁欲の険しい道筋から全く逸れなかったわけではないことを当然視してきたことには議論の余地がない。彼女の名前には悔い改めようとしない情熱の香気が漂い，いわゆる行いの正しい若い女性というわけではなかったという仄めかしが付き纏っている。このことは，彼女を謳った詩人が彼女の秘密を，今時の言い方をするなら，すっぱ抜いて，後世まで伝えたというしるしなのだろうか？　とはいえ，詩のどの部分が彼女の名誉に傷をつけているのかはっきりと指摘しようとしても難しかったというのも確かなことである。

It was incontestable that, whether for right or for wrong, most readers of certain of Aspern's poems…had taken for granted that Juliana had not always adhered to the steep footway of renunciation. There hovered about her name a perfume of impenitent passion, an intimation that she had not been exactly as the respectable young person in general. Was this a sign that her singer had betrayed her, had given her away, as we say nowadays, to posterity? Certain it is that it would have been difficult to put one's finger on the passage in which her fair fame suffered injury.

（30　強調筆者）

語り手はこのように，自身の推測は詩という根拠に基づくものであり，アスパンの読者の多くが共有するものだと主張しているようだ。だがそれと同時に，「多くの読者」が当然視していたことについて，正しいかどうか定かではないと付け加えたり，詩の中にはっきりとした根拠がないと認めるなど，奇妙な揺れが示されてもいる。

この続きで，ジュリアーナはアスパンと出会うよりも前に外国人の恋人との悲劇的な別れを経験していたのだと物語ることからすると，ジュリ

アーナの人となりについて，語り手は「多くの読者」の考えを踏襲しているようである。そうであれば，「多くの読者」と自身とを区別しようとしているかのような部分は，むしろ，詩そのものに若い女性の評判を傷つけるような箇所はないのだと述べること，つまり詩人を擁護することに力点があると見ることもできよう。

リチャーズは，「語り手は仮説に基づいて考えを進めるのだが，そうした仮説の多くは語り手の美意識には充分に正しいと感じられるため，直ちに確信へと昇格する the narrator works on hypotheses, many of which satisfy his sense of aesthetic rightness, and they are promoted almost immediately to certainties」（125）と述べているが，このジュリアーナについての仮説はまさにその典型例と言えるだろう。そして，さらにリチャーズが戒めるように，「読者も同じことをしそうになるものだが，相応に確実な証拠がない場合には，読者は影響を受けないようにしなければならない Readers are tempted to do something similar, but this has to be resisted if there is no fairly firm evidence available」（125）のもまた確かである。

アスパンの詩が提示されない以上，読者は語り手の解釈もしくは推測の正当性について直接に判断することはできない。だが物語には，語り手の解釈の正当性を相対化してしまうような情報が他にもある。一つは，語り手が詩に歌われたジュリアーナを語る際（上記引用の中略部分）に，「［アスパンの］詩はシェイクスピアのソネットと比べて神聖さにおいて引けを取らないし，それほどに曖昧でもない poems not as ambiguous as the sonnets —— scarcely more divine, I think —— of Shakespeare」（30）と述べていることだ。シェイクスピアのソネットと言えば，ヴィクトリア朝の当時において，詩に謳われた登場人物のモデルについて諸々の説が提出され論争されていたものである（Sillars 136-141）。それを引き合いに出して「それほどに曖昧ではない」と言うことは，相当程度に「曖昧」であると

いうことを意味しているようでもある[3)]。

さらに興味深いのは，判断材料を共有しているはずのカムナーの「説」との齟齬である。カムナーはジュリアーナのことを，「彼女は詩人が訪れた家の家庭教師であって，その立場ゆえに，初めから二人の間柄には公にはできないような，あるいは人目を忍ばねばならないような要素があった that she has been a governess in some family in which the poet visited and that, in consequence of her position, there was from the first something unavowed, or rather something quite clandestine, in their relations」（30）と考えているらしい。品行の良さが雇用の絶対条件と言える家庭教師と，語り手の考えているような自由奔放な芸術家の娘とでは，19世紀の若い女性の在り様として両極端と言えるほどに食い違っている。アスパンの詩その他の情報が，両方の解釈を許容するのだとすれば，そこにはもともとジュリアーナの境遇を読み取るための具体的な手掛かりはほとんどないのだと考えざるを得ず，またカムナーの「説」の提示はそのことを示唆する働きをするように思われる。

語り手が描き出す，若き日のジュリアーナ像は具体的で真に迫っており，また，後に登場する肖像画がミス・ボルドローの父親の手になるものだという情報と相俟って，信憑性があるように見えてしまう。だが結局は，語り手の仮説／見解／私見に過ぎず，詩から読み取られたとされる情報はアスパンとジュリアーナの関係を特定する材料とはならないのである。

3．アスパンの書簡

次に，ミス・ボルドローの手元にあるというアスパンの手紙についての検討に移ろう。カムナーと語り手は，ミス・ボルドローはアスパンの生涯を調査するための「いまだ存命の唯一の情報源 the one living source of information」（6）であり，また彼女の所有する文書はアスパンと彼女と

のつながりを明らかにするための重要な資料であると見なしている。

語り手によれば，「老婦人は縁（ゆかり）の品，形見の品について話題にされることさえ拒んでThe old woman won't have her relics and tokens so much as spoken of」（８）いて，それはそうした品が「私的で微妙で内密なpersonal, delicate, intimate」（８）ものだからであるし，カムナーの問い合わせに対する返信に「ミスター・アスパンの《遺文 literary remains》など所有していない」（８）と書かれていたのは，「老婦人の不自然でもない作り話 the old woman's not unnatural fib」（９）である。相談相手のプレスト夫人が，本当に持っていないのかもしれないと疑問を投げかけると，語り手は真っ向から否定して，返信には「内的証拠 internal evidence」（９）があると言う。プレスト夫人が問う。

「内的証拠？」

「彼女が《ミスター・アスパン》と呼んでいることです」

「それが何の証明になるのか分からないわ」

「それは親しさの証ですし，親しさは形見の品，形あるものの所有を暗に示しているのです。……シェイクスピアを《ミスター》なんて呼ばないでしょう」

「でも，シェイクスピアの手紙を箱にいっぱい持っていたからといって，そう呼ぶかしら」

「呼びますとも。もしシェイクスピアがあなたの昔の恋人で，誰かがその手紙を欲しがったとすれば」

'The internal evidence?'

'Her calling him "Mr Aspern".'

'I don't see what that proves.'

'It proves familiarity, and familiarity implies the possession of

mementoes, of tangible objects…. You don't say "Mr" Shakespeare.'

'Would I, any more, if I had a box full of his letters?'

'Yes, if he had been your lover and someone wanted them.'（9）

プレスト夫人の疑問はもっともであって，果たして語り手の説明に納得したのかどうかは定かではない。もし仮に詩人のことを，いかにも親し気にファースト・ネームで呼んだとすれば，親密さの証を読み取ることもできよう。だが，面識のあったことが知られている人物に《ミスター》の敬称をつけたからといって，形見の品の所有や恋人関係を読み取るのは論理の飛躍と言わざるを得ない。

むろん，語り手の期待通りに，アスパンの書いた親密な内容の手紙をミス・ボルドローが実際に秘蔵していることが明らかになったのであれば，語り手の推測は結果として裏付けられることになったろう。だが物語の中で，書簡の内容が明らかにされることはないどころか，語り手がそれを目にすることさえないことは，よく知られている通りであって，書簡の実在性には疑問の余地がないわけではないと指摘されてもいる（Poole 1983 ix, Bell 126, O'Gorman 183）。だがまた，書簡はもともと存在しないと考えることは，ミス・ボルドローの所有している文書についてティーナが語り手に話した様々な情報の全てが虚偽であると見なすことに繋がる。それはあり得ないことではないものの，「容易ならざるほどに冷酷で懐疑的な態度を要する this requires an improbably ruthless scepticism」（Poole 1983 ix）と同時に，物語の中にはっきりとした根拠のない推測となるだろう。

では，ティーナの証言に偽りはなく，かつアスパンの「遺文 literary remains」など存在しないというミス・ボルドローの言葉も偽りではないということはあり得ないのだろうか。アドリアン・プールが指摘するように，'materials', 'documents', 'literary remains', 'relics and tokens', 'tangible

objects', 'mementoes', 'spoils'と作品中で様々に呼び変えられる問題の文書について,「語り手も,そしてもちろん読者も,それらが何であり,それらに何が書かれているのかをきちんと知ることはない the narrator, let alone the reader, never knows exactly what these things are nor what is in them」(Poole 1983 ix)。では,果たしてティーナは知っているのだろうか。

ティーナと語り手との会話でアスパンの書簡が最初に話題になるのは,第6節のゴンドラでの外出の折に,語り手が「ミス・ボルドローは価値のある文書をお持ちなのですね she has papers of value?」と問い,ティーナが「伯母は何でも持っています she has everything!」と答える場面だ(48)。この答えを「貴重な証言 precious evidence」(48)だと考えたのは語り手である。それに続く会話でティーナが,はるか昔にミス・ボルドローの身の上に何かしら出来事があったのだと話すと,語り手が問い返す。

> 「何かしらですって?　どんな出来事ですか?」私は見当もつかないというふりをして尋ねたのだ。
> 「ああ,何も聞いてはいないのです」そしてわが友人が本当のことを言っているのは確かだった。
> 彼女の透みきった様はじれったいほどで,この時には,これほど無邪気でなかったら,もうすこしうまく立ち回れているのではないかと感じたものだ。「出来事というのは,ジェフリー・アスパンの手紙や書類――つまり,伯母さまがお持ちのもののことですが――それと関係があると思いますか?」
> 「きっとそうですわ!」と,彼女はそれがいかにも良い思いつきだというように声を高めた。「わたしはどれも見てみたことはありませんけれど」
> 「どれもですって?　それならどうして,何なのか分かるんです?」

「分かってはいません」ミス・ティーナは落ち着いていた。「手に取って見たわけではありませんから。でも伯母が取り出しているところは見ました」

「しばしば取り出してご覧になるのですか？」

「今はしませんけれど，かつては。とても大切にしているのです」

'Something? What sort of something?' —— and I asked it as if I could have no idea.

'Oh she has never told me.' And I was sure my friend spoke the truth.

Her extreme limpidity was almost provoking, and I felt for the moment that she would have been more satisfactory if she had been less ingenuous. 'Do you suppose it's something to which Jeffrey Aspern's letters and papers —— I mean the things in her possession —— have reference?'

'I dare say it is!' my companion exclaimed as if this were a very happy suggestion. 'I've never looked at any of those things.'

'None of them? Then how do you know what they are?'

'I don't,' said Miss Tina placidly. 'I've never had them in my hands. But I've seen them when she has had them out.'

'Does she have them out often?'

'Not now, but she used to. She's very fond of them.' (50)

この会話から分かることは，「ミス・ボルドローが所有しているもの」を「ジェフリー・アスパンの手紙や文書」と特定したのは語り手であり，ティーナはその考えに「きっとそうだ」と賛成したに過ぎない。そしてティーナの証言によれば，ミス・ボルドローが何らかの文書をしばしば取り出して大切そうに扱っていたのを見たことがあるが，ティーナ自身はそ

れをどれ一つとして手に取って見たことはないので，その内容については本当のところは「知らない」のである。

問題の文書は，ミス・ボルドローの死後の第9節でも語り手とティーナの間で話題になる。2回の会話の中でティーナは，ミス・ボルドローが死の床まで持ち込んで秘蔵していた文書を取り出し，いったんライティングデスクにしまって，後に焼き捨てたと言っているので，その段階では，ティーナは手に取ったことがあることになる。だがその会話においても，それらの所有物はただ「文書papers」あるいは「ものthings」と呼ばれるだけで，それらとアスパンとの関係について特定できるような言及はない。ティーナが内容を検(あらた)めたのかどうかは定かではなく，また，ティーナの口からは，ミス・ボルドローの所有していた文書について，アスパンが書いてミス・ボルドローに送ったものなのかどうかを特定する主旨の発言は一度もなされていないということになる。

物語の中でティーナは，‘honest’(41)，‘truthfulness’(42)，‘conscientiously’(47)，‘candour’(48)，‘limpidity”(50)，‘ingenuous’(50) などと，繰り返し誠実さや率直さを意味する言葉と結び付けられている。それらが語り手の判断に依存するものである以上，そうした描写が正当であるのかどうか定かではなく，ティーナの発言の真偽も究極的には不明である。だが，もしティーナの説明を誠実なものであると受け入れるならば，ミス・ボルドローには誰にも内容が知られないように秘蔵していた何らかの文書があったことは事実だが，それがアスパンといかなる関係にあるものなのかは不可知であり，従って問題の文書の実在は，ミス・ボルドローとアスパンとの関係が極めて親密なものだったことの証明とはならないということになる。

4．アスパンの肖像画

ここからは，語り手が最終的に所有することになる肖像画について検討してみよう。肖像画は，実在性に疑問の余地がなく，他ならぬミス・ボルドローから直接，語り手に提示されたものであるという点で，ほかの物的証拠である詩句や文書とは事情が異なっている。その証明力を考察するためには，それがどのように物語に導入されるかを検討する必要がある。

第７節で語り手の面会に応じたミス・ボルドローは，貸室の延長が期待通りの６か月ではなく１か月だけという約束になった直後，近頃は「古びた安ぴかものold gimcracks」に高価な値がつくらしいと言って，「くしゃくしゃの白い紙にくるまれた小さなものan small object wrapped in crumpled white paper」を取り出し，「相応の値段であれば手離してもよいI would part with it only for a good price.」と言って語り手の反応を見る（57-58）。語り手は「一見してジェフリー・アスパンであると認識したAt the first glance I recognized Jeffrey Aspern」（58）が，わざと知らぬふりをして「誰なのか教えてくださいDo tell me who he is」と尋ねると，ミス・ボルドローは次のように答える。

> 「私の昔の友人で，往時はとても高名だった方（かた）です。ご本人から頂いたのですが，名前は言わないでおきますよ。批評家で歴史家のあなたなのに，聞いたことがないといけませんしね。世の中は進むのが速くて，前の世代のことなど今の人たちは覚えていないんでしょう。この方（かた）は，私の若い頃，それはそれはもてはやされていたものだけれど」
>
> ‘He’s an old friend of mine, a very distinguished man in his day. He gave it me himself, but I’m afraid to mention his name, lest you never should have heard of him, critic and historian as you are. I know the

world goes fast and one generation forgets another. He was all the fashion when I was young.’（58）

語り手は「著述家だったのではありませんか？　きっと詩人ですよね Wasn’t he a writer? Surely he is a poet.」（58）と水を向けるが，ミス・ボルドローはそれを無視し，モデルの名前どころか，何をしていた人物なのかさえ決して口にしない。ミス・ボルドローの与えた情報は確かにアスパンにも当てはまるが，当人だけに限定されるものではない。つまるところ，この「名もない絵描きの描いた，誰だか分からない人の肖像画 a likeness of a person you don’t know by an artist who has no reputation」（59）とミス・ボルドローが呼ぶものに，描かれているのはアスパンだと決め込んだのは語り手であり，ミス・ボルドローはそれを肯定も否定もしていないのだ。

もちろん，語り手が考えているように，ミス・ボルドローの拒絶的態度は，過去を詮索しようとする語り手に対する拒否反応でもあるだろう。だがそのことは直接的に，アスパンの肖像をアスパンと名指していないということを意味するわけではない。しかもミス・ボルドローは，この肖像画を見せるにあたって，‘curiosities’ や ‘old gimcracks’，さらには ‘all the fashion’と口にしているのは，その絵をいささか軽んじた態度ではないだろうか？　まるで「不用品 ‘throwaway’」（Veeder 32）のような扱いをしているのではないだろうか？　この肖像画のモデルは，果たして本当にアスパンなのだろうか？　過去を詮索することへの強い嫌悪感を表明し，語り手に対して「真実は神のものであって，人のものではない。そっとしておくべきなのです ‘The truth is God’s, it isn’t man’s: we had better leave it alone.’」（56）と断言して間もない場面で，ミス・ボルドローはアスパンの肖像画を金銭的交渉の材料に使ったりしたのだろうか？　鑑定させよう

という語り手の申し出を拒絶するかのように，さっさと仕舞ってしまったのはなぜなのだろうか？

すでに述べたように，語り手は肖像画がアスパンのものだと確信している。その語り手による肖像画の描写は次のようなものだ。

> それは入念な作品だったが，最高の芸術品というわけではなかった。ふつうの細密画よりは大きく，描かれている若者は極めて端正な顔立ちで，襟の高い緑色の上着と淡い黄褐色のベストを身に着けていた。このささやかな作品からは実物とよく似ているという長所が感じ取れ，モデルが25歳頃に描かれたものと推測された。世に広く知られているように，この詩人の肖像画は他に３点あるが，どれ一つとしてこの優美な似姿ほど早い時期のものはない。
>
> It was a careful but not a supreme work of art, larger than the ordinary miniature and representing a young man with a remarkably handsome face, in a high-collared green coat and a buff waistcoat. I felt in the little work a virtue of likeness and judged it to have been painted when the model was about twenty-five. There are, as all the world knows, three other portraits of the poet in existence, but none of so early a date as this elegant image.（58）

このように語り手は，芸術品としての価値はあまり高くないらしい肖像画に，もっぱら似顔として，つまり歴史資料としての価値を見出している。ところで，アスパンは「世紀がまだ若かった頃 when the century was young」（５）に活躍した詩人で，語り手はもちろん「本人を見たことはない I've never seen the original」（58）。しかもこれは老婦人の衣服のポケットに入るほど小さい肖像である。語り手の「実物とよく似ている」と

いう判断は，どれほど当てになるものなのだろうか？

テッサ・ハドリー（Tessa Hadley）は，語り手は「ミス・ボルドローが口を開くときはいつでもジェフリー・アスパンについての暗号化されたメッセージを発していると思い込んでいる [our narrator] imagines that every time Miss Bordereau opens her mouth she makes some coded reference to Jeffrey Aspern」（321）と評しているが，我々はそれに付け加えて，語り手はミス・ボルドローの持ち物は何でもジェフリー・アスパンに縁（ゆかり）の品だと思い込んでいる，と言ってもよいのではないだろうか。語り手の確信がそうした予断に基づいている可能性は否定できず，結局，肖像画もまたミス・ボルドローとアスパンと恋人の関係にあったことを証明できないように思われる。

5．ミス・ジュリアーナ・ボルドロー（？）

以上で，物語に登場する証拠物件，つまり詩句，文書，肖像画のそれぞれについてつぶさに検証していくと，いずれもミス・ボルドローとアスパンとがいかなる関係にあったのかを特定するための証明力には欠けるということを確かめてきたわけだが，ここにさらに根本的な疑問が浮かび上がるように思われる。それは，果たしてミス・ボルドローは詩人アスパンのミューズであったジュリアーナなのかという疑問である。

もとより物語の中で，ミス・ボルドロー本人は自らの過去について口を閉ざしている。語り手の知っている（と思っている）ことは，もっぱら伝聞と推測に基づいている。語り手の相談相手で，ヴェニス暮らしの長いプレスト夫人も，ミス・ボルドローとほとんど交際はなく，わずかな噂を聞いたことがあるに過ぎない。登場人物のうちでミス・ボルドローから直接に情報を得る機会があったのは，姪のティーナのみということになる。

ティーナは，20年前ならミス・ボルドローはアスパンの話をしていた

と言う。それによると，「アスパンはミス・ボルドローのもとを訪れ，外出に連れ出していたHe used to call on her and take her out」(39)。アスパンはミス・ボルドローを「とても好ましく思っていたhe liked her immensely」し，ミス・ボルドローはアスパンを「神だったhe was a god」と言っていたとのことである（40)。確かにこれは，二人が深い仲にあったことを示唆しているようでもある。だが文字通りに受け取るならば，社交上の礼儀に基づいた交際のようでもある。あるいは逆に，誇張を含んだ表現である可能性さえないわけではない。例えば，語り手にしても，プレスト夫人をしばしば訪れているし，一緒に外出もしている。事情を率直に打ち明けて相談に乗ってもらい，知恵を貸してくれてもいるプレスト夫人のことを，語り手は「とても好ましく思っている」と言うのではないだろうか。ティーナは，たくさんの花を贈ってくれ，ゴンドラで家の外の世界に連れ出してくれた語り手は，自分のことを「とても好ましく思っている」と思っているのではないだろうか。アスパンが同時代の女性たちに熱狂的に人気があったというなら，彼女たちはこぞってアスパンを「神」と崇めていたのではないだろうか。あるいはまた，ハドリーが語り手のミス・ボルドロー観を引用して示唆するように，ミス・ボルドローは「揶揄的な軽口 mocking lambency」のつもりで「神」と言っている（322）という可能性さえないわけではない。そうなってみると，ミス・ボルドローがアスパンと交流があったというのは事実であるらしいが，どの程度に親密であったのかのを判断するのは難しく，ましてやアスパンが詩に讃えた女性がミス・ボルドローであったと断定するのはさらに難しいということになる。

さらに注意を要するのは，ミス・ボルドローが語り手に対して明かさないのはアスパンの名前だけでなく，自分の名前もだということである。ジョゼフ・ローゼンバーグ（Joseph Rosenberg）は，ミス・ボルドローが家賃の領収証を渡さないことに注目して，語り手が「偽りの名前とにせも

のの名刺を用いて邸(パラッツォ)に入り込んだことを見抜いているかのように，ジュリアーナも身元を隠す決意をしている As if knowing that the narrator has entered her *Palazzo* under an assumed name —— with a false card —— Juliana too decides to mask her identity」と論じている（261）。だが実は，ミス・ボルドローが「自分の名前を署名した紙の一片 a morsel of paper with her name on it」（27）をも与えなかったのはこの時だけではない。カムナーからの問い合わせに対する返信を書いたのはティーナなので，ここにもミス・ボルドローの署名はないのだ。

また，ミス・ボルドローは口頭でも自分の名を口にしていない。第3節の語り手とミス・ボルドローの初対面の場面は情景法——ジェイムズの用語では〈劇〉——によって進行し，対話が省略のない直接話法または間接話法の形式で語られている。室内に通された語り手が〈ジュリアーナ〉との対面に感極まって見つめている中，ミス・ボルドローの発した第一声は，「この家は街の中心からずいぶん離れていますが，小さい運河はとても具合(コム)が良(イル)いものです(フォ) Our house is very far from the centre, but the little canal is very *comme il faut.*」（16）である。なんの前置きも自己紹介も抜きなのだ。語り手が「照会状や身元証明書 references, guarantees」（17）を提出すると言うが，ミス・ボルドローはその時には何も反応せず，対話が進んだ後になって，「あなたが誰でも構わないし，知りたくもない I don't care who you may be —— I don't want to know」（18）と言い，続けて「部屋はいくつでもお貸ししましょう——お金をたっぷり払うのなら You may have as many rooms as you like —— if you'll pay me a good deal of money」（18）と結ぶのである。結局，語り手が退去するまで名前のやり取りはない。ミス・ボルドローは相手の偽りの名前を受け取ることをせず，自分の名前を（本物も偽物も）与えることも拒否したことになる。

さらに，ミス・ボルドローが誰かにジュリアーナと呼ばれる場面もな

い。確かに語り手はミス・ボルドローのことを繰り返しジュリアーナと呼んでいる。だがそれは全て思考の中でのことで，面と向かってやティーナに対して，ミス・ボルドローをジュリアーナと呼ぶことは慣習上あり得ない。登場人物のうちで，ミス・ボルドローを呼ぶのにファースト・ネームを用いる可能性があるのは姪であるティーナだけであるが，そのティーナが物語に書かれている中で伯母／叔母の名前を口にするのは，突然に訪れて下宿を申し込んだ語り手に邸の主の名前を尋ねられた時だけで，ティーナの答えは「もちろん，ミス・ボルドローですよ！　Why Miss Bordereau !」（14）である。

一度もジュリアーナとは名乗らず，一度もジュリアーナと呼ばれないこの老婦人は，それでもやはりカムナーと語り手が確信しているように，ジュリアーナなのかもしれない。ミス・ボルドローが語り手の詮索を強く拒否していることは確かであり，身元を明かさないことは，過去へと繋がる手がかりの一切を封じることを意味するからだ。だが，詮索を忌避する過去の出来事というのがアスパンとの経緯であることが必然というわけでもなく，ミス・ボルドローがジュリアーナであるということが確実なわけでもない。そして，ミス・ボルドローがジュリアーナではなかったとしても，あるいはアスパンの遺文を所有している立場にはなかったとしても，それを語り手にあえて明言しない動機がないわけでもない。金銭的利益である。

語り手のミス・ボルドローに対する振る舞いは，儀礼上，当然必要とされるはずの紹介者もなしに突然に邸へ押しかけて部屋を借りたいと言った，そもそもの初めの時から，プレスト夫人が言うように，著しく「胡散臭 louche」（15）く，断られたとしても当然なものだ。さらに語り手は法外な家賃をあっさり承諾し，傷んだ部屋や荒れた庭は費用を払って改修し，ふんだんに花を贈り，「名もない絵描きの描いた誰だか分からない人

の肖像画」に強い執着を見せてもいる。こうした金に糸目をつけない語り手の態度は，全てアスパンに縁（ゆかり）の品を我が物にしたいがためであり，そのことをミス・ボルドローはどうやら見抜いているように見える。高齢のミス・ボルドローはティーナに遺すための財産を欲している。カムナーに宛てて，アスパンの遺文など所有していないと明言していることを考慮すれば，ミス・ボルドローは嘘を言ってもいない。むしろ偽名という嘘を使って近付いていったのは語り手の側である。語り手が勝手に確信していることをミス・ボルドローが利用しているとはしても，「金儲けの手段があるということを彼女に思いつかせたのは，語り手に他ならない it was I [the narrator] who had put into her head that she had the means of making money」（54）という語り手に考えは，まさにその通りと言えなくもない。

語り手はミス・ボルドローに，「偉大な詩人に霊感を与え不滅の詩を生み出させた女性の面影 the image of the woman who had inspired a great poet with immortal lines」（54）を見出そうとしている。しかし実際に直面させられているのは，いつでも「金銭の問題 pecuniary question」（22），「貪欲な性向 acquisitive propensity」（43），「金銭的利益の権化 this vision of pecuniary profit」（44），「強欲 cupidity」（54）である。「ジュリアーナ」のそうした姿に戸惑い，辟易した語り手は，ついにミス・ボルドローのことを心の中で「陰険な老いぼれ魔女 a subtle old witch」（57）とさえ呼んでいる。デニス・フォスター（Dennis Foster）は，ミス・ボルドローの「アスパンという資産を現金化しようとする to liquidate her Aspern assets」かのような振る舞いを「ジュリアーナの信用詐欺 Juliana's confidence game」（73）と呼び，語り手を「カモ the easy mark」（70）と評しているが，もし仮に現金化しようとしている資産がそもそも幻なのだとしたら，この表現はなおさら的を射たものとなる。ミス・ボルドローが，もとはアメリカ人とはいえ，「姓から察するところフランスの血筋をひいているらしく their

name implied of some remoter French affiliation」（3），しかも「長い異郷での暮らしのうちに一切の国民性を喪失したと思われている believed to have lost in their long exile all national quality」（3）ということを考え合わせると，ミス・ボルドローには，ジェイムズの国際テーマにおける〈ヨーロッパの悪〉の投影を見ることもできそうである[4)]。

む　す　び

ジェイムズが序文で触れているように，現実の歴史において，シェリーの心酔者だったキャプテン・シルスビーは，シェリーの義妹でバイロンの恋人だったこともあるクレア・クレアモントと実際に対面した。同様に，物語の中の語り手もアスパンの恋人だった女性に対面したのかもしれない。そしてシルスビーと同様，結婚を条件に迫られて逃げ出したため手紙を手に入れそこなったが，シルスビーとは違って詩人の肖像画は譲り受けることができたのかも知れない。それが物語の中の歴史に符合する事実なのか，あるいは語り手の事実誤認に過ぎないのかを，確定するための内的証拠は物語中に存在しない。確かなのは語り手が，ヴェニスにひっそりと暮らしていたミス・ボルドローと名乗る一人の老婦人をジュリアーナと呼び，その老婦人が持っていた（あるいは持っていなかったかも知れない）内容不明の文書を詩人アスパンの遺文と呼び，また老婦人の持っていた肖像画に描かれた身元不詳の若者をアスパンと呼んだということである。

そして物語「アスパン文書」は，語り手のそうした確信を拠り所として成立している。フィレンツェに滞在中のジェイムズは，クレアモントが存命であったことに気付かず，従って直接に対面する機会を逸したことを，むしろ幸いだったとのちに序文に書いている。その理由は，「根拠が確実だとして示されるものが最少であるほうが，最大であるよりも，想像力を備えた者にとっては，どういうわけかいつでもうまい働きをするものだ

という奇妙な法則 that odd law which somehow always makes the minimum of valid suggestion serve the man of imagination better than the maximum」（*The Art* 161）があるからだとしている。そして，「歴史家は，本質的に，より多くの本当に利用できる資料を欲するのに対し，劇作家は本来よりも多くの自由勝手のみを欲するのである The historian, essentially, wants more documents that he can really use; the dramatist only wants more liberties than he can really take.」（161-162）と述べ，さらに，「少なくとも私は，物事に意味を読み込んで完全に立証され保証されたふりをするような過度の単純さを，確かに免れている I had certainly at the very least been saved the undue simplicity of pretending to read meanings into things absolutely sealed and beyond test of proof」（162）と述べている。歴史家としてより多くの資料を求めていたはずの語り手は，実のところ，作家としての自由を享受していた。そして，「物事に意味を読み込んで完全に立証され保証された」つもりでいながら，実は想像力によって物語を紡ぎ出していたというのが，まさに語り手が成していたこと，あるいは作者ジェイムズが語り手に為させていたことのように思われるのである。

＊本論は日本英文学会第 89 回大会（2017年 5 月20日）における口頭発表と部分的に重複している。

注

1） ただし，語り手の相談相手であり，アスパン関係者に対して語り手よりも客観的な視点を持っているであろうプレスト夫人が，ティーナはミス・ボルドローの姪というほどの年齢ではなく，むしろ「甥または姪の娘 grand-niece」（ 5 ）なのではないかと推測していることは，ティーナがアスパンとの間の娘であるという解釈を成立しにくくするものと思われる。その場合，ティーナはミス・ボルドローの孫であるという可能性が生じるだろうが，それも作品中の情報を根拠としない解釈であることに変わりは

ない。

2） この箇所では，語り手が自分とアスパンを繋ぐ「聖遺物 the sacred relics」について思い巡らす流れの中でティーナに考えが及んでいる。語り手が，ティーナにもまたアスパンと強い結び付きがあるかもしれないことを否認している可能性はある。

3） ステュアート・シラーズ（Stuart Sillars）によると，ヴィクトリア朝期にはシェイクスピアの人物像への関心が大いに高まり，作品から伝記的事実を読み取ろうとする試みも盛んであった。特にソネット集は格好の材料とされていた。なお，オスカー・ワイルド Oscar Wilde の「W・H 氏の肖像」"The Portrait of Mr. W. H." が発表されたのは，「アスパン文書」発表翌年の1989年である。

4） 語り手の身をすくませるミス・ボルドローの〈目〉は，『アメリカ人 *The American*』に登場する侯爵夫人の，その視線で夫を殺害したとされる目を連想させる。

引 用 文 献

Bell, Millicent. "'The Aspern Papers': The Unvisitable Past." *Henry James Review* 10 (1989): 120–127.

Flannery, Denis. *Henry James: A Certain Illusion*. Aldershot: Ashgate, 2000.

Foster, Dennis. *Sublime Enjoyment: On the Perverse Motive in American Literature*. Cambridge UP, 1997.

Hadley, Tessa. "'The Aspern Papers': Henry James's 'Editorial Heart.'" *Cambridge Quarterly* XXVI (1997): 314–324.

James, Henry. *The Art of the Novels: Critical Prefaces*. New York: Charles Scribner's Sons, 1950.

———. *The Aspern Papers and Other Stories*. Ed. Adrian Poole. Oxford: Oxford World's Classics, 2013.

Miller, J. Hillis. *Literature as Conduct: Speech Acts in Henry James*. Fordham UP: New York, 2005.

O'Gorman, Francis. "'Fabulous and illusive': Giorgione and Henry James's 'The Aspern Papers' (1888)." Henry James Review 27 (2006): 175–187.

Poole, Adrian. "Introduction." *The Aspern Papers and Other Stories*. Ed. Adrian Poole. Oxford: Oxford World's Classics, 1983.

———. "Introduction." *The Aspern Papers and Other Stories*. Ed. Adrian Poole.

Oxford: Oxford World's Classics, 2013.

Reesman, Jeanne Campbell. "'The Deepest Depths of the Artificial': Attacking Women and Reality in 'The Aspern Papers.'" *Henry James Review* 19 (1998): 148–165.

Richards, Bernard. "How Many Children Had Juliana Bordereau?" *Henry James Review* 12 (1991): 120–128.

Rosenberg, Joseph Elkanah. "Tangible Objects: Grasping 'The Aspern Papers.'" *Henry James Review* 27 (2006): 256–263.

Rowe, John Carlos. *The Theoretical Dimensions of Henry James*. The University of Wisconsin Press, 1984.

Sillars, Stuart. *Shakespeare and the Victorians*. Oxford UP, 2013.

Veeder, William. "The Aspern Portrait." *Henry James Review* 20 (1999): 22–42.